

肉の上を 粘菌は通った

SCARTS×CoSTEP
Art&Science Project

市原佐都子 Satoko Ichihara

The Slime Mold Passed Over the Meat

2026年1月31日|土| - 2月11日|水・祝| 10:00-17:00

会場 | 札幌文化芸術交流センター SCARTS (SCARTSモールA・B・C、コート、スタジオ)

人間の生殖活動と、数億年にわたり生き続けてきた粘菌の営みが交差するとき、市原佐都子が新たに書き下ろした2つのモノログを学習するLLM(Large Language Model)と粘菌は、どのような独自のネットワークを生み出し、私たちに何を響かせるのでしょうか。

テーマ「プレコンセプションケア*」から着想を広げ、市原佐都子が「粘菌とAI」をモチーフに、本プロジェクトの成果として初のインスタレーション作品を発表します。成果作品では、自ら開発したAIと共に作品制作を行うアーティスト・岸裕真を協働制作者に迎え、北海道大学の研究者のアドバイスを受けながら、人類が減じた後の世界においても活動を続ける粘菌が、合唱曲を生成していくというフィクションの世界を立ち上げます。

テーマから派生する予測不能なアーティストの創造力と、成果発表に至る探究の過程をあわせて紹介することで、相互に関わり合うアートとサイエンスが人間の知覚や思考の前提を静かにずらし、新たな感覚を示します。

*将来の妊娠・出産を見据えて現在の健康状態や生活習慣を見直すという考え方。WHOが妊娠前の医学的・社会的支援を推奨しており、近年注目されている取り組みです。

●招聘アーティスト:

市原佐都子 | 劇作家・演出家・小説家・城崎国際アートセンター芸術監督
Satoko Ichihara

1988年大阪府生まれ福岡県育ち。桜美林大学にて演劇を学び、2011年より劇団Q始動。人間の行動や身体にまつわる生理、その違和感を独自の言語センスと身体感覚で捉えた劇作、演出を行う。2011年、戯曲『虫』にて第11回AAF戯曲賞受賞。2018年、KYOTO EXPERIMENT公式プロブグラムにて『毛美子不毛話』『妖精の問題』を二本立て上演。2019年、初の小説集『マトの天使』を出版。同年『バックスの信女—ホルスタインの雌』をあいとりエンターレにて初演し、同作にて第64回岸田國士戯曲賞を受賞。2021年、ノイマルクト劇場(チューリヒ)と共同制作した『Madama Butterfly』はチューリヒ・シアター・スペクタクル、ミュンヘン・シユピラト演劇祭、ウィーン芸術週間、ロームシアター京都(2022年)を巡演。2022年、ロームシアター京都「レパトリーの創造」にて、『妖精の問題 デラックス』を上演。2023年、『弱法師』を世界演劇祭(ドイツ)にて初演。高知・豊岡・東京を巡演後、2024年にフェスティバル・ド・ドンヌ・ア・パリで上演。



©Bee Borders

●作品制作:

岸裕真 | アーティスト
Yuma Kishi

1993年生まれ。AIを「Alien Intelligence(エイリアンの知性)」と捉え直し、人間とAIによる創発的な関係「エイリアンの主体」を掲げて、自ら開発したAIと協働して絵画、彫刻、インスタレーションの制作を行う。主な活動として、個展「Oracle Womb」(2025、√K Contemporary)、企画展「DXP2」(2024、金沢21世紀美術館)など。著書として「未知との創造:人類とAIのエイリアン的出会いについて」(2025、誠文堂新光社)。受賞歴に「CAF賞2023」入選など。本展では、市原と協働のもと、竹森達也(AbstraktEngine)と成瀬陽太をメンバーに加え、新作インスタレーション作品の制作を行う。

●協力:

北海道大学 電子科学研究所 知能数理研究分野
Mathematical and Physical Ethology Laboratory,
Research Institute for Electronic Science, Hokkaido University

粘菌をはじめ、ラッパムシや有殻アメーバなど単細胞生物の知的な行動を数理的な視点で読み解こうとしている。野外から単細胞生物を採集し、飼育できたあかつきには様々な振る舞いに出くわすことになる。思っていたよりも複雑な一面が見えてくることも。現在は100種類を超える単細胞生物+23名といった多様なメンバーで活動中。本展では、粘菌に関する情報提供、映像撮影、生体展示への協力を行う。

SCARTS×CoSTEP アート&サイエンスプロジェクト

札幌文化芸術交流センター SCARTSと北海道大学CoSTEPが共同し、若い世代のアートとサイエンスに対する探究心や感性を養うことを目的としたプロジェクト。アートの創造性と科学的な探究との相互交流により、世界をひろげる学びの場をつくることを目指しています。社会的に関心の高い科学的トピックからテーマを設定し、アーティストはそのテーマを出発点として自身の関心領域に引き付けリサーチを重ね、表現に結びつけます。その新たな視点や価値を見出す過程を一緒に体験するトークイベントやワークショップ、成果発表会を実施しています。

A. Q/市原佐都子『妖精の問題』Photo by Kai Maetani, courtesy of Kyoto Experiment B. Q/市原佐都子『バックスの信女—ホルスタインの雌』Photo by Shun Sato C. Q/市原佐都子『弱法師』©Theater Commons Tokyo '24/ Photo by Shun Sato D. 岸裕真『Organs』Photo by Yunosuke Nakayama E. 粘菌の一種『モジコロリ』提供:北海道大学 電子科学研究所 知能数理研究分野 F. 北海道大学の研究室にて顕微鏡で原生生物を観察する市原佐都子 G. アーティスト×研究者オープンミーティング「時間展望—もっと先の自分へ」(2024年8月1日) Photo by Yusuke Momma

アーカイブ上映

市原佐都子が過去に発表した演劇作品の記録映像を上映します。

会場 | SCARTSスタジオ
無料・予約不要

『妖精の問題』

(制作・初演 | 2017年 | fig.A)
*2018年上演時の記録映像を上映します。*上映時間 | 約120分

2016年に起きた障害者殺傷事件で感じた違和感を起点に、市原が自身のなかに存在する優生思想や現代社会の価値観を問う作品。『妖精』は社会の中で不可視化される存在の隠喩である。落語・音楽・セミナーという異なる形式の三部構成を一人の役者が演じる。

『バックスの信女—ホルスタインの雌』

(制作・初演 | 2019年 | fig.B)
*2020年上演時の記録映像を上映します。*上映時間 | 約150分

エウリピデス『バックスの信女』を下敷きに、性愛や差別など現代の諸相を織り込んだ岸田國士戯曲賞受賞作。主婦と雄犬、人間とウシのハーフラのドラマが、ヒトと動物の境界と性や生殖の価値観を揺さぶる。

『弱法師』

(制作・初演 | 2023年 | fig.C)
*2024年上演時の記録映像を上映します。*上映時間 | 約90分

日本古来の説話「後徳丸伝説/弱法師」を原案に、文案の構造を取り入れて現代的に再解釈した人形劇。ラプドールやマネキンなど多様な人形が人間の欲望を演じ、その関係性を通して、生と非生の境界を揺さぶり「人間とは何か」を問いかける。

協力 | 一般社団法人Q

*上映スケジュールはウェブサイトをご確認ください。
*性的・暴力的描写を含みます。推奨年齢:16歳以上。

関連イベント

参加無料・予約不要

アーティスト×研究者トーク

1月31日(土)14:00-15:30

会場 | SCARTSモールC

登壇者 |

[アーティスト]市原佐都子、岸裕真

[研究者]中垣俊之、越後谷駿

(北海道大学電子科学研究所)

おしゃべりアート

2月7日(土)・8日(日)11:00-14:00

市民とアートのつなぎ手として活動する「札幌アートコミュニケーションーズ」と作品をより楽しく鑑賞しませんか。作品を見て、感じたことを自由におしゃべり、おもしろかったことや疑問に思ったことをみんなで共有しましょう。
※時間内はいつでも自由に参加いただけます。



詳細はウェブサイトをご確認ください。

ACCESS



・札幌市営地下鉄東西線、南北線、東豊線「大通」駅30番出口から西2丁目地下歩道より直結
・JR「札幌」駅南口から徒歩約20分
・駐車場は当館地下ほか近郊の有料駐車場をご利用ください。

お問い合わせ:

札幌文化芸術交流センター SCARTS
札幌市中央区北1条西1丁目 札幌市民交流プラザ 2F
TEL:011-271-1955(9:00~17:00※休館日を除く)



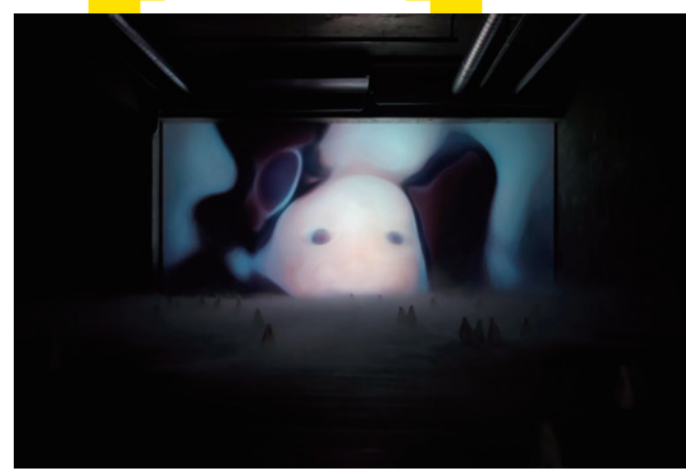
A



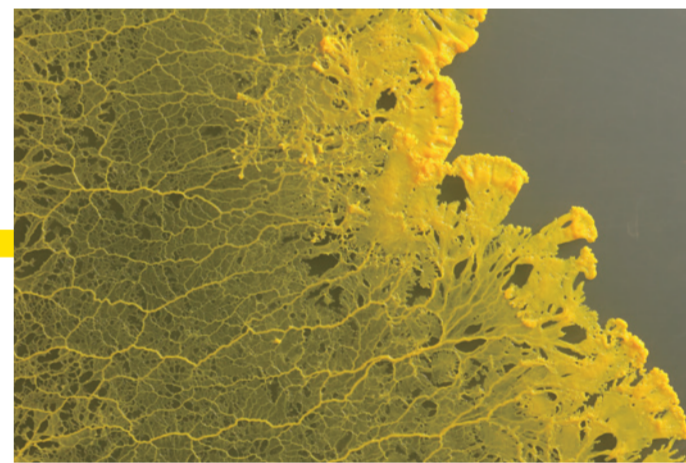
B



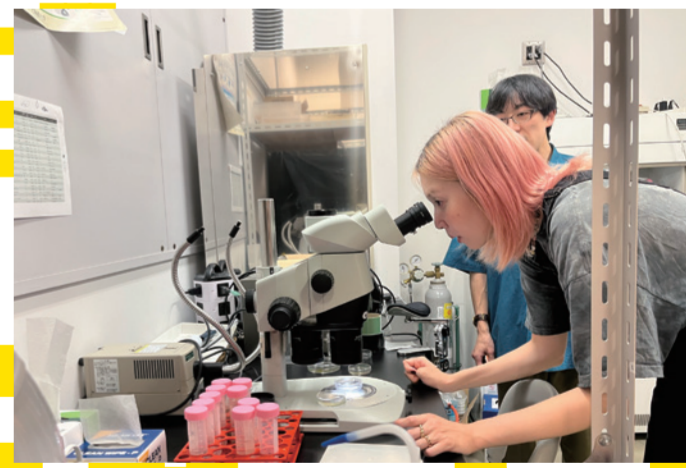
C



D



E



F



G

肉を増やす能力を持ったお母さんはいつも不安を抱えていました。粘菌はこの世界の隅から隅まで通って、その通過の跡でこの世界のすべてを運動で覚えていた。